

## 学生による授業評価は何を測定しているのか

松尾 太加志 近藤 倫明  
(北九州市立大学文学部)

学生による授業評価は、一般に学期末に評定尺度による質問紙によって行われることが多い。その評価結果は、FDの授業改善の有益な材料になると考えられている。しかし、学生の回答は、教員の教え方、学生の理解・興味、科目自体の内容などの要因に影響を受けるため、直接的に改善点を見つけることは難しい。一方、教員の教え方を反映するものとの観点から、教員評価に利用している大学もある。しかし、学生による評価は、教員の教え方以外の要因がかなり大きいいため、その結果を直接教員の評価に利用するについては検討の余地がある。

学生による授業評価は、教員に帰属する要因を探るために実施されているが、実際の回答は、それ以外の要因による可能性が高い。

本研究では、2年間に渡り同じ科目「心理学実験」で学生による授業評価を実施したデータを比較し、学生による授業評価では何が測定されているのかを検討し、学生による授業評価はどのように活用すべきなのかを考察する。

### 方法

被調査者 北九州市立大学文学部人間関係学科心理学系の2年生。2002年度30名(男性6名、女性24名)、2003年度27名(男性5名、女性22名)。  
質問紙 選択回答で、授業内容についての9項目、教え方についての14項目、資料・機器利用についての7項目、設備環境についての6項目、総合評価の4項目、受講者自身の評価の3項目で、合計43項目で、いずれも、「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法とし、5点から1点で回答を求めた。ただし、総合評価の1項目については0点から100点までの点数で評価を求めた。また、自由記述の欄を別に設けた。

手続き 心理学系2年生の必修科目「心理学実験」の授業の各年度の最後の時間(2002年7月、2003年7月)に質問紙を配布し、回答後、その場で回収。

### 結果と考察

各年度を比較するために、回答の平均値についてt検定を行った。その結果、「内容は興味深かった」、「この授業を受けて新しい知識や考え方が習得できた」、「配布資料は授業の内容に適切だった」において差に傾向があることがみられ( $p < .10$ )、2002年度のほうが当てはまるという回答であった。また、「シラバス通りの内容だった」では、2003年度が当てはまるという回答が高く、有意な差がみられた( $p < .05$ )。「教員自身が内容を十分理解して、教えていた」、「レポートの課題は、学生の理解度にあっていた」では、2002年度のほうが当てはまるという回答が高く、有意な差がみられた( $p < .05$ )。図1では、有意な差及び差に傾向が見られた値のみを示した。

各年度とも、同じ教員がほぼ同じ内容の授業を行ったため、教員の教え方の違いの結果を反映したものとは考えにくい。シラバスの内容、配布資料の適切さ、教員の理解度などの年度間での回答の違いは、教員ではなく、学生に帰属する要因によるものと考えられる。

また、学期の最初に非公式にゼミの希望を尋ねたところ、この授業への関心が2003年度の学生が相対的に低く、学生のレポート課題の成績でも2003年度のほうが低かった(図2)。したがって、興味、知識などの習得、学生の理解度との適合などは、学生の興味関心が相対的に2003年度で低かったことを反映し、成績結果にも影響を与えたと考えられる。

同一教員の同じ授業でも、数値上、学生の回答結果では差がみられたため、教員の教え方だけに帰属させた評価には利用できない。しかも、授業の最後に実施する評定結果だけからは、どこに原因があるのか特定しづらく、授業改善のデータとしても有効性は高くない。学生による授業評価は、毎時間ごとに、どのような点が理解しづらかったのかを具体的に指摘してもらうことが重要であり、一般に行われている学生による授業評価は、授業改善や教員の教え方の評価としては妥当性がかなり低いといえよう。

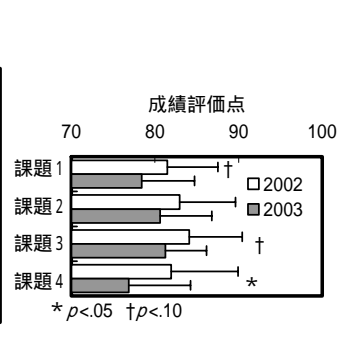
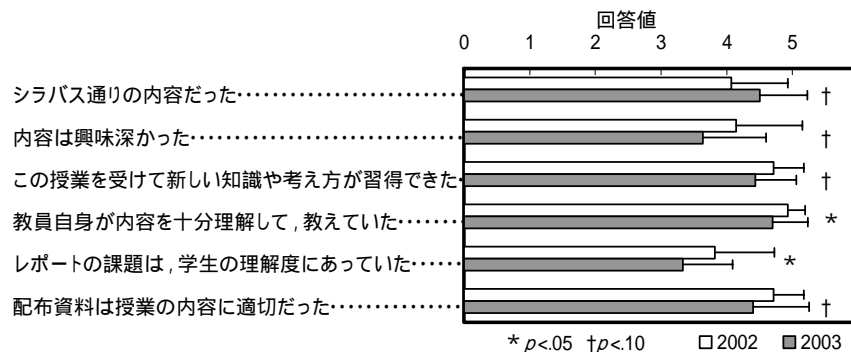


図1 授業評価質問紙において年度間で有意差あるいは差に傾向があった項目 図2 各年度のレポート課題の成績の比較